

シャルル・アンドレールのドイツ社会民主党批判

——ジョレス・アンドレール論争の紹介——

平 瀬 徹 也

一

第一次世界大戦前の国際社会主義運動におけるドイツ社会民主党（以下、SPDと略記）の比重と威信の巨きさについては今さら多言する必要はあるまい。⁽¹⁾ それだけに、第一次大戦の開戦に際して、一九一四年八月四日の帝国議会でSPDが戦費案に賛成投票したことが内外に与えた衝撃の強さと揺がりは未曾有のものがああり、この「八月四日」の問題は今日に至るまで歴史家によりくりかえし論及される争点をなしてきたのであった。⁽²⁾

ところで、八月四日の行動で一挙に表面化したSPDのこうした変質、体制内政党化が突然のものではなく、長期にわたる変容の過程の帰結であったことは今日でこそ誰しも異論のないところであろうが、当時（一九一四年以前）はSPDの獲得した四百万の得票、一一〇名の同党所属代議士（ともに一九一二年の帝国議会選挙における数字）、国家内国家の観もあつた強大な党組織と

いった諸事実に隠されてそれほど重大視されていなかった。その結果、同党の反帝国主義的平和主義的言動のみがその実態とかげはなれてクローズ・アッパされていた。そうした状況下で、SPDの反帝国主義、反体制がタテマエにすぎず、実際には当代の帝国主義的植民地主義的風潮にむしろまかれており戦争阻止勢力として信をおきえないことを指摘してフランス内で反響を呼んだ——むしろスキヤンダルを惹きおこしたといった方が実情に近い——のが本稿に紹介するシャルル・アンドレール（一八六六—一九三三）の小冊子『現代ドイツにおける帝国主義的社会主義』であった。アンドレールはフランス社会党内でこそ一級党員にすぎなかったが、パリ大学文学部教授（ドイツ語・ドイツ思潮）、何冊ものドイツ思想の専門書の著者で、共産党宣言のフランス語訳者でもあり、いわば自他ともに認めるフランスにおけるドイツ問題の権威であった。したがってかれの発言は党幹部のものではないといえ、一活動家の発言として聞きながせる性質のものでは到底なく、党指導者ジョレスのはげしい反論を招いたのは当然であった。

ドイツ社会民主党史に甚だうとい私が本小冊子とそれが惹きおこしたアンドレル・ジョレス論争との大要を紹介するのは必ずしも適任でないが、管見の限りでは我が国ではほとんど言及されていないようなので、第一次大戦前の国際社会主義運動を理解する上で何ほどの意味があるのではないかと考え紹介の筆を執つたしだいである。したがって小文はアンドレル・ジョレス論争について格別新しい見解を呈示するものではなく、論争のスケッチにすぎない。

なお、原著の内容は最初、急進派系月刊誌『ラクシオン・ナショナル (L'Action nationale)』の一九二二年十一月号、十二月号に同名の論文として二回に分けて発表された。私が参照できたのは、同じ出版社から一九一三年に公刊された(刊行年月の記載はないが巻末の追記その他から一九一三年四月中旬以前であることは確実)小冊子版と、ジョレスのアンドレル批判やアンドレルの再論等を収載した増補版(一九一八年)⁽⁴⁾であるが、以下の引用ページ数はすべて増補版に統一した。

二

本書は、はしがき、第一章 ヒルデブラント事件、第二章 その他の社会主義的植民地主義者たち、第三章 社会主義的対外政策、から成っている。

「はしがき」で著者はまず、一九一一年秋すなわち第二次モロッコ事件(アガディール事件)直後にドイツに滞在して社会主義

者の労働者・知識人と話を交したりSPDの新聞を読んだりした者は誰でも「奇妙な混乱」(五五頁)を目撃したとする。かれらが驚かされたのは平和を求めたデモがまれであったことであり、社会主義者がアガディール事件に対して示した「さまざまな共感」(同頁)であった。ドイツ政府が脅迫的であっても何ら驚くに足らないが、驚くべきはSPDの重要部分がこの官筋筋の「脅迫趣味」(五六頁)を分けあっていたことである。SPDのかなりの部分が「植民地主義と軍国主義に、おそらく資本主義にも改宗した」(同頁)のであり、その諸理由を知りそれらが今後優位を占めるか否かを知ることが重要であるとアンドレルは本書執筆の意図を述べている。

第一章はゲルハルト・ヒルデブラント (Gerhard Hildebrand) がその帝国主義や植民地主義への公然たる加担により一九一二年秋のSPDケムニッツ大会で除名された事件を論じている。

フランス社会党内で右派に属しマルクス主義に一貫して批判的であったアンドレルにとってヒルデブラントもその編集者の一人である『社会主義月報 (Sozialistische Monatshefte)』の修正主義的傾向は決して非難さるべきものではなくむしろ好ましいものである。したがってアンドレルはヒルデブラントの主張の多くを後述するように根拠ありとさえ考えている。しかし、アンドレルの見るところでは、ヒルデブラントは経済学的にはフリードリヒ・リストの真の後継者であり社会主義者ではもはやない(五七―五九頁)。したがってかれを除名したのはSPDとしては「必要な統制権の行使」(五八頁)であり正当であった。ヒル

デブラントは古いドグマに囚われている古参幹部たちより知的には優っているが、逆に後者は「社会主義的人間性と言うべきものについてのより正しい感覚」(五九頁)をしばしば有している。問題はSPD内部でヒルデブラントの思考が少数ではないことであり、かれ個人の除名により事態は変化しない。「『ノイエ・ツァイト』の政治路線は日和見主義に傾いている」(六〇頁)。

ついでアンドレールはヒルデブラントの二著作、『工業支配と工業社会主義との動揺』(一九一〇)と『社会主義的対外政策』(一九一一)の内容を分析する。

アンドレールによればヒルデブラントの中心的思想は、労働者階級の繁栄は、(1)人口とともに常に増大する工業生産の進行と、(2)この人口に衣食を供するための十分な土地という二条件と結びついている、という点にある(六五頁)。工業は農業生産を促すためにも不可欠であるが、過度の工業発展は人口を農業から奪いとり、食料価格を騰貴させ、その結果ヨーロッパ先進国の目を海外の農業国に向けさせる。しかし、後進農業国といえども例えばアメリカ合衆国やカナダ、オーストリア、ハンガリー、ロシアの如く自国の工業を發展させ、食料供給力を失いつつある。これがヨーロッパの物価高の原因である。これら後進諸国は三十年以内に工業化を完成し、食料や衣料原料をもちや供給することをやめるであろう。しかし、最大の危険はこれら諸国が先進国の工業製品をもちや買入れなくなることである(六六―七〇頁)。それは労働者階級の生活の崩壊をもたらす。なぜなら工場の社会化国有化も耕地不足を如何ともしがたいからである。したがって工業

社会主義と工業資本主義の運命は一体である(七二―七三頁)。

アンドレールによればヒルデブラントのこうした推論はそれ自体誤りではなく、また、チューネンからリスト、ロードベルトゥスに至るドイツ経済学の伝統を継ぐものである。しかし、大筋において未来を正しく予測しているが、その進行の速度を誇張しており、その結果、むしろ危険を促進するという誤った提案に帰している(七三―七四頁)。すなわち、「社会主義的観点からしても植民地併合は西欧工業諸国にとってもドイツにとっても現実的必要となつてゐる」ということになる(七五頁)。しかし、アンドレールによれば現実のドイツの経済発展は目ざましいものである。ヒルデブラントは植民地の「社会主義的」分配について語っている。しかし、かれの論法に従えば鉱物資源に乏しいフランスはベルギーやルール地方の鉱山を要求する権利があることになる(七九頁)。

「ヨーロッパの植民地分配に存在する信じられないほどの不均衡は消え去らねばならない」のであり、さもなければ戦争となろうとヒルデブラントは警告する(八一頁)。小国ポルトガルが広大な植民地を保有するのは「社会主義的」でないとかれは考える。かれはポルトガルの「歴史的権利」など気にかけない。こうした乱暴な議論はドイツにその例は乏しくないが、それが「社会主義的」であるというほど厚顔な人はこれまで無かつたとアンドレールは皮肉っている(以上、八三頁)。

つづいて第二章ではヒルデブラントと異りSPDを除名させられなかったマックス・シッペル (Max Schippel)、ルートヴィヒ・クヴェッセル (Ludwig Quesel)、アトランティクス (Atlanticus)、シューデクム (Südekum) らの植民地容認論をとり挙げているが、ヒルデブラントの場合と比較してきわめて断片的な取上げ方なので、クヴェッセルとアトランティクスの主張の一部をみるにとどめる。

クヴェッセルの「帝国主義の経済的意味」(『社会主義月報』第十二分冊、一九一二年)によれば植民地領有には二つの利点がある。第一に、植民地国家ないし利権所有会社は植民地の橋梁、鉄道、港湾施設、軍事施設などを本国からしか買入れない。第二に、衣料、羊毛、綿花といった消費物資の輸入は国家が直接買入れない時でさえ通常の取引関係でもやはり本国に利益をもたらす。こうした諸理由から英領インドは英国の金属製品をドイツのその三十倍も輸入し、英国の綿製品をドイツのその三十四倍も輸入している。しかもインドでは全ドイツ工業に門戸が開放されているのである(九三―九四頁)。

このように植民地有用論を説くクヴェッセルは「ドイツ帝国主義者たちの全著作から熱い炎となってわれわれの顔に吹きつける対英憎悪は精神錯乱としてではなくドイツ所有階級の経済的にきわめて根拠ある反抗の表現とわれわれには映る」と述べて所有者階級の対英憎悪と労働者階級の怨恨を結びつける。これによってもSPDを除名されたヒルデブラントと党に残留したクヴェッセルの相違がどれほど僅かであるかが分るとアンドレールは結

論する(九四―九五頁)。

同じように、非妥協的マルクス主義者アトランティクスは、カール・カウツキーの序文つきその著『未来国家警見』(一八九八年)において早くも、「ドイツの植民地は社会問題解決の文字通り決定的な要素である」と述べている(九五頁)。かれによれば社会主義国家といえどもその植民地産品の補給のために、またドイツで短期間に必要とされる一千万頭の牛と三千万頭の羊の大群を養うためにもおそらく新しい土地を必要とする。したがって今後は植民地予算に反対投票してはならず、むしろ国家が大規模な熱帯農業基地を自ら建設するよう要求せねばならない。「われらに植民地を、より多くの植民地を、(Her mit den Kolonien! Mehr Kolonien!)」(九六頁)。

第三章でもひきつづいてドイツ社会主義者の帝国主義的植民地主義的論調が紹介されているが、注目されるのは、SPDの争う余地なき指導者、いな全インターナショナルの畏敬的であるアウグスト・ベーベル (August Bebel) その人に批判の筆が及んでいることである。アンドレールはベーベルの一九〇五年三月二九日と十二月七日の帝国議会演説を例にひいてベーベルはこの頃からドイツ政府の植民地主義の生ぬるさを非難していたとし、ベーベルの主要な関心がモロッコにおいてフランスが優越的地位を獲得することを妨げることであったと見る(一〇七頁)。

自身アルザス生まれの愛国主義者であるアンドレールはドイツの同志たちが愛国主義的であることを非難するわけではない。かれもベーベルの、「もしドイツが外国の侵略の犠牲となるならば

白髪の私もマスケット銃をとるだろう」との有名な帝国議会発言をすばらしいと考える。だが、耳新しいのはベーベルのイエナ大会（一九一一年）での次のような開会演説中の発言である。

「軍備縮小問題はもはや我々を将来へだてはしない。合言葉は軍備縮小ではなく軍備増強である」（一一一頁）。

アンドレールの結論を聞こう。「約言すれば、新ラッサール派ドイツ社会主義にとって労働者階級は資本主義と一身団体であり植民地政策と一身団体である。労働者階級は軍備政策と一身団体であるが、この政策は原則としては防衛的であるが必要とあれば攻撃的となる。そして、もしドイツ帝国が攻撃的ないし防衛的な戦争に巻きこまれるならば、ドイツ労働者はドイツ帝国の敗北を願いはしないだろう。したがって、かれらは自国の政体と一身団体であり、現王朝の維持と文字通り利害をともにしている。この社会主義はその良心の欠如により目新しい……。この新しい教義は唯一つのプロレタリアート、ドイツ・プロレタリアートの利益を保全する。この教義はおそらく勝利を占めるだろう。支配を渴望するドイツ社会主義には願ってもない教義である。」（一二四—一二五頁）。「今後明らかとなるだろうことは、軍事費に賛成する用意がありドイツ外交を悩まさないように決心し王朝との連帯を強調する社会主義が存在するということである。これこそ権力に到達できる唯一つの社会主義であり、したがって大衆の心をひきつける社会主義である。」（一二六頁）。このように結論したのちアンドレールは、この問題に対するフランス社会党指導者ジャン・ジョレスの積極的な発言を切望して筆をおいている。

四

アンドレールの問題提起の重要性はかれのパリ大学教授、ドイツ問題専門家という個人的権威を抜きにしても明らかであり、たとえ直接に発言を促されなかったとしてもフランス社会党指導者としてジョレスには沈黙を守ることは困難であつたろう。「それはジョレスの全戦術的立場に挑戦した」（ゴールドバーグ⁽⁶⁾）からである。

しかし、以上のように言うことは、のちのSPDの行動を知るわれわれの先入観に幾分かは影響されているように思われる。実際にはアンドレールの問題提起は直ちに社会党幹部の反論を惹きおこしはしなかった。『ラクシオン・ナシオナル』誌は比較的新しい雑誌で有力誌というには程遠く、かりに社会党幹部のうち何人かが論文に目を通していたとしても——それすら確実ではないが——三年兵役法⁽⁷⁾反対闘争の最中でもあり当面無視した方が得策と思われたであろう。

ところが、独立派社会主義者でジャーナリストのエミール・ピユン(Emile Bure)が『ル・タン(Le Temps)』紙の『アンドレ・タルデュー(André Tardieu)』や『ラクレール(L'Eclair)』紙のエルネスト・ジュデ(Ernest Jude)にアンドレール論文への注意を促したことが契機となつて両紙が社会党の平和主義を攻撃する目的でこの論文を紹介した。こうしてアンドレール論文は議会廊下の話題ともなるに至り、社会党としても沈黙をつづけるこ

とが不可能となった。

こうしてシヨレスはようやく一九一三年三月四日付の『リュマニテ (L'Humanité)』紙に「誤った引用」と題する一文を発表するに至るが、さらに詳しい裏話としてアンドレールは、『リュマニテ』紙の実質責任者ピエール・ルノーデルが周囲に促されてSPD幹部会に照会の手紙を書いたこと、それに対してSPDが反論を強くすすめる返書を送った事実を紹介し、シヨレスの介入をその結果であるとしている。⁽⁷⁾

シヨレスはこの短い反論の中で、アンドレールが「ひとがわれわれに対して言いふらす全毒物の大供給者となって」おり、「かれの不正確な機知、逆説、誤りで的はずれの引用は最悪のナシヨナリストたちのこの上ない道具となっている」ときめつける。⁽⁸⁾シヨレスはアンドレールが批判したヒルデブラント以下の発言には言及せず、ベーベルのイェナ大会の発言のみを取りあげる。シヨレスによればアンドレールは文脈を無視した恣意的な引用をしているばかりでなく、「さらに重大かつ恐るべきことには」、ベーベルの発言から四つの単語を削除している。すなわち、「ベーベルは八合言葉は軍備縮小ではない✓とは言っていない。かれは八ブルジョワ的ヨーロッパにとって合言葉は軍備縮小ではない✓と言ったのだ。für das bürgerliche Europa」⁽⁹⁾(傍点は原文イタリック)。こうしてシヨレスはSPDイェナ大会の速記録を根拠にアンドレールを激しく非難した。

シヨレスはつづいて三月三十一日と四月三日の『リュマニテ』紙でもこの問題を取りあげてアンドレール批判をくり返しているが

内容にはくり返しが多い——アンドレールが右翼の社会党攻撃に材料を提供しているとの——ことと、『リュマニテ』紙が反論掲載を拒んでおり公平でないとのアンドレールの訴えに対する拒絶——アンドレールは自分の発言を悪用している『ル・タン』紙や『レクレール』紙にまず反論の手紙を書くべきだとの——がますます批判の中心となり、新しい内容に乏しい。⁽¹⁰⁾

これに対して、『リュマニテ』紙での反論の機会を与えられないアンドレールは一九一三年四月六日付の『レクレール』紙に反論を掲載している。その内容は大別すれば二点あり、第一に、アンドレールがSPD全体を帝国主義、植民地主義にむしばまれていと書いたとするのは全く不当な誤解であり、かれはわずか三箇所を除けば常に伝統的ドイツ社民党とその新しい波である帝国主義的一派とを区別しているとする。これはこの後しばらくアンドレールがくり返し主張する論点であるが、これまでの紹介からもいささか無理という他なく、シヨレスらがSPD全体への批判と理解したのも当然であった。じじつ、この年の八月にはアンドレール自身この区別を棄てたと自認するに至る。⁽¹¹⁾

第二点として、アンドレールはベーベルの発言を改ざんしたとのシヨレスの非難を真向から否定し、「ブルジョワ的ヨーロッパにとって」なる四つの単語をベーベルがイェナ大会で発言したことはなく、SPDがのちに記録に追加した言葉であると、『フォアヴェルツ (Vorwärts)』(一九一一年九月二二日、二二三号)所載の公式速記録とプリンケプス (Prinzepts) 版を根拠に再主張し、全体としても文脈を無視した恣意的引用では全くないと主張

した。⁽¹²⁾以後もアンドレールは反論の手を休めないが、ジョレスはとり合わなかったようである。

五

けつきよく、このジョレス・アンドレール論争は双方の言い放しに終わったが、ジョレスの真意については両極端の二説が存在する。ゴールドバーグは「心底ではジョレスはアンドレールの挙証は度外れに誇張されており、かれの主張は本質的には無価値であると確信していた」として、なが年の協力の経験から生まれたジョレスのSPD幹部への信頼はゆるがなかったと見るのに対し、ゼヴァエスは「おそらくジョレスは心底では、かくも多数の社会民主党員が無分別に誇示した帝国主義的植民地主義的傾向をそう装っていたほどには安心していなかった」と判断している。⁽¹³⁾

今日ふりかえってみてSPDの本質をめぐるとの論争においてアンドレールがジョレスよりも鋭く事態を見通していたというのは容易なことである。たしかにSPDはアンドレールが予想した通り、「軍事費に賛成し」、「自国の政体と一身同体」となった。ジョレスがラインの彼方の同志たちに寄せた熱い期待は裏切られた。論争の勝敗は自明であるかに見える。最新のジョレス伝の著者ラポーは「かれ（ジョレス＝平瀬）に認められる唯一度のこの知的勇気の衰弱を疲労により説明すべきであろうか？⁽¹⁴⁾かれの精神において願望が明晰をしいでいた」と評価している。

だが、こうした見方はやや一方的で皮相であろう。政治家であ

るジョレスには学究のアンドレールのように自由な発言が許される訳ではなかった。SPDが国際主義的立場を棄て去る可能性がどれほどのものであれ、その逆の可能性が残されている限りジョレスにはSPDの同志を励まして大戦勃発阻止のために協力することが最善の途と思われたとしても不思議ではない。かれ自身けっして楽観的ばかりでなかったことは時にかれの口からもれる発言にもうかがわれるが、⁽¹⁵⁾かれには絶望している暇すらなかったように思われる。逆に、アンドレールが自分の問題提起が社会党の三年兵役法反対闘争に与える悪影響を全く認めない事実には驚かされる。⁽¹⁶⁾

ジョレスが第一次世界大戦開幕寸前の一九一四年七月三十一日、一狂信者の手にかかって暗殺されたことは周知の通りであるが、アンドレールはジョレスの葬儀への出席を拒んで親友リュシアン・エルを立腹させた。⁽¹⁷⁾しかし、アンドレールが開戦時のドイツ社会民主党の行動に自らの主張の正当化を見出したのは当然であった。「ドイツとフランスの社会主義政党的錯誤はジョレスを暗殺者の銃弾の的とした」とまでかれは述べている。⁽¹⁸⁾

大戦勃発後、アンドレールはほとんどのフランス社会党員と同様に政府の戦争遂行政策に協力し、大戦終了までその立場は変わらなかったようである。論争以来フランス社会党から身を引いた形で、大戦後は「アルザス・ロレーヌ共和国」に属して故郷アルザスとロレーヌのフランスへの円滑な統合のため尽力した。以後は、ニーチェ研究を大成するなど学究としての活動に身を入れる傍ら、労働者階級への文化普及運動にたずさわり、ドイツにおけ

るナチズムの勝利を目撃した直後の一九三三年春、世を去った。

なお、本稿ではこのジョレス・アンドレル論争に対する国内
国外の反響、とりわけSPD側の反応については未調査のため言
及できなかった。ただ、一九一三年四月十八日付『フォアヴェル
ツ』紙には「現代ドイツにおける帝国主義的社会主義」と題する
パリ通信員の手になるとおぼしき(無署名)パリ発の記事がある⁽¹⁹⁾。
内容は同月十三日にパリ郊外モンルージュ(アンドレルの所属
地区)の社会党地区集会でのアンドレルの弁明演説——一九一
八年版に所収——とサロモン・グランバック(Salomon Grumbach)
の駁論を紹介したもので、とても公平とは言いかねる嘲笑的な文
章——もちろんアンドレルに対して——であるが、この集会で
ベーベルとカウツキーのグランバック宛の手紙が披露されている
事実はSPD側が寄せた関心の大きさを示していると見てよかれ
う。ちなみに、グランバックが『フォアヴェルツ』のパリ通信員
だったとのルフランやラボーの記述が正しければ、グランバック
は自分が当事者であった立会演説会の記事を自ら書いたことにな
る。

註

- (1) ここでは、第三インターナショナル(コミンテルン)に
対してソ連共産党ないしソ連政府が行使した強大な影響
力と、第二インターナショナルに対するSPDの影響力
を対比したジェームズ・ジョルの指摘を挙げるにとどめ
る。James Joll, *The Second International 1889—*

1914, (London, 1955) introduction p. 3.

- (2) 平瀬徹也・三宅立「第一次世界大戦とヨーロッパ」『岩
波講座・世界歴史』24 所収)一〇三頁参照。(ドイツ
に関する章は三宅執筆)

- (3) Charles Andler, *Le Socialisme imperialiste dans
l'Allemagne contemporaine*, (Paris, Bureaux de l'
Action Nationale, s. d.), 44pp.

- (4) Charles Andler, *Le Socialisme imperialiste dans l'A-
lemagne contemporaine, Dossier d'une Polemique
avec Jean Jaurès (1912—1913)*, (Paris, Editions
Bossard, 1918), 259pp. 旧版に比して頁数が著しく増
しているのは、版型が大版からポケット版になったこと
に加えて、五十頁に及ぶ新版序文、『リュマニテ紙』所
収のジョレスの三篇の短いアンドレル批判の論説、同
じく哲学者フェリシアン・シャライによる批判、アンド
レルの長短五篇におよぶ反批判や再論を収めているた
めであるが、原論文に関しては新旧両版の間に異同はな
い。なお、今回は『ラクシオン・ナショナル』誌自体は
参照できなかった。以下、本文中で「本書」という時、
旧版の内容(つまり原論文のみ)をさす。

- (5) 他に、最近、ナチスのユダヤ民族絶滅政策の先駆として
H・U・ヴェーラーの指摘などで注目されている帝政ド
イツの西南アフリカ・ヘレロ族絶滅政策についてアンド
レルがすでに「民族全体の絶滅」として言及している

のが注目される。(一〇四頁) ヴェーラーについては、村瀬興雄「ドイツ現代史における連続性の問題」(『成蹊法学』第3号・一九七二・二)参照。

- (9) Harvey Goldberg, *The Life of Jean Jaurès*, (Madison, 1962) p. 435 多言するまでもなく、シヨレスはフランス社会党指導部はSPDの反帝国主義、平和主義の真剣な有効性を信じ、その上に立って丁度この頃、政府提案になる二年兵役法に対して激しい反対運動を展開していったのである。

- (7) Andler, *op. cit.*, Introduction (p. 40) この論争に言及しているシヨレス研究書は管見の限りではラボーを除いてこのSPDの働きかけに言及していない。その理由は明らかでないが、真偽がもう一つ確実でないかと判断したためかもしばしば。cf. Goldberg, *op. cit.*, pp. 435—437, Maurice Lair, *Jaurès et l'Allemagne*, (Paris, 1935) pp. 207—211, Alexandre Zévaès, *Jean Jaurès*, (Paris, 1951) pp. 230—232, Jean Rabaut, *Jaurès*, (Paris, 1971), p. 504.

- (8) Andler, *op. cit.*, p. 132.

- (6) *Ibid.*, p. 134.

- (10) *Ibid.*, pp. 135—142, 146—149. なお、アンドレルはシヨレスのこれら三回の反論とりわけ三月三十一日のそれはパリ在住ドイツ人ジャーナリスト(複数)の御膳立になるものでシヨレスのものとは認め難いとしている。

ibid., Introduction (pp. 41—42) p. 136. このドイツ人ジャーナリストの一人は当時『フォアヴェルト』紙のパリ通信員でのち兩大戦間期にフランス社会党員として活躍するサロモン・グランブックではなからうか。cf. Georges Lefranc, *Le Mouvement socialiste sous la Troisième république (1875—1940)* (Paris, 1963), p. 189. Rabaut, *op. cit.*, p. 505.

- (11) 区別については *ibid.*, pp. 150—152. 区別の放棄については p. 45, p. 230. 同じく、この論争において他のフランス社会党幹部はほとんどシヨレスの側に立った。Goldberg, *op. cit.*, p. 559 (n. 56, n. 59). アンドレルの盟友リュシマン・エルを例外ではなかった。Charles Andler, *La Vie de Lucien Herr* (Paris, 1932) の新版(一九七七年)へのJ・レーモンの序文(p. 23).

- (2) Andler, *Le Socialisme impérialiste*, pp. 152—153. かれがその後改ざんを否定し続けた点は *ibid.*, pp. 232—258. ちなみに、

アンドレルのもう一つのベール批判はベールのロイド・シヨージュ非難に関連している。アンドレルが「かれよりも平和的な大臣を見出すことはできない」と評価するロイド・シヨージュは一九一一年七月二二日、アガデーイル事件に関連して、「英国について私に言えることは他国の繁栄にわれわれほど利害を有する国は世界に存在しない……。平和はこの繁栄の第一の条件であ

る……。だが、もしその死活の利害にふれる諸問題で英国が諸国民の集いで取るに足らないものとして扱われるならば、どうあっても平和をという考えはわれわれのよきな国がたえることができない屈辱であることを私は強く主張する」という有名な演説をおこなってベーベルの非難をうけた。しかし、アンドレルによれば「この賢明な演説を批判することは英国労働党代議士マクドナルドの仕事ではあろう。あらゆる国家の社会主義諸党の役割は自国の支配者を批判することである。(しかるに平瀬)ベーベルはこうした批判を行うことで欲すると否とにかかわらず粗暴なゲルマンの田舎紳士に加担した」。すなわちベーベルは英国の当然の主張への反対においてドイツ支配層の味方をしたと非難した。*ibid.*, pp. 154—155. マンドレルにおいてもベルンシュタインの場合と同様にその親英的傾向を指摘できよう。かれは一八九一年、英国に遊学してフェビアン主義の研究に打ちこんでいる。

- (13) Golders, *op. cit.*, pp. 437, Zévaès, *op. cit.*, p. 233. ノーモンとゼヴァエースと同意見である。Andler, *La Vie de Lucien Herr*, p. 23. ルフランの社会党史も同様。Lefranc, *Le Mouvement socialiste*, p. 190.

- (14) Rabaut, *op. cit.*, p. 506.
 (15) 第二インターナショナル・バーゼル大会(一九一二年)の最中、シヨレスは事務局書記でベルギー労働党のカミ

リュ・ユイスマーンズ(Camille Huysmans)に次のように語っている。「われわれはあらゆる可能性を考えておかねばならない。君の特別の地位はきわめて重要である。もし戦争が勃発すれば、現在は最強の国際主義者と見られている人々にそうした出来事がどんな影響を及ぼすかは分らない。何事がおころうとも君はその地位を離れてはならない。君は交戦諸国の労働者階級の間をきずなを維持しなくてはならない」Goldberg, *op. cit.*, pp. 434—435, 558(n. 46). マンドレルとシヨレスの相違は前者がSPDの国際主義に信頼を置き得なかったのに対し、後者は極限状況下ではどの国の社会主義政党の国際主義にも信頼を置き得ないと考えた点にあるとも言える。ただ、断定的なことを言うには未だ材料不足であろう。

- (16) Andler, *Le Socialisme impérialiste*, pp. 156—157.
 (17) Jacques Viard, *Une lettre inconnue de Charles Andler à Charles Péguy en 1913*, (*Revue d'histoire moderne et contemporaine*, Tome XIX—3, 1972) p. 498. 以下のマンテレルの経歴はひろくそのサイヤール論文と前述したAndler, *La Vie de Lucien Herr*. シャン・メートロン編『フランス労働運動人名辞典』第十巻を参照した。
 (18) Viard, *op. cit.*, p. 500. 「私はよき見張人であった。私は社会に奉仕さえした」(*ibid.*, p. 501)に、かれの心境がうかがわれる。

(19)

アムステルダム社会史研究所のカウツキーフルヒーフ関係文書からこの記事を探し出し筆者の蒙を啓かれた西川正雄氏に深謝する。なお、同氏によれば、カウツキーは『ノイエ・ツァイト (Neue Zeit)』 XXXI (1913) に論争への短評を寄せている由。